



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

PSJ2022 CONFERENCE PROGRAM

第 25 回（2022 年度）大会プログラム・発表要旨集

日時：2022 年 11 月 26 日（土）／27 日（日）

会場：Zoom オンライン、京都大学

★ 本プログラム目次 ★

大会テーマ・スケジュール・大会参加登録	p. 2
プログラム一覧表	p. 3

26 日	□頭発表 room 1	p. 7
	□頭発表 room 2	p.10
	□頭発表 room 3	p.13
	□頭発表 room 4	p.16
	会員総会	p.19

27 日	基調講演 1	p.20
	基調講演 2	p.20
	シンポジウム	p.21
	大会発表賞表彰式・閉会式	p.22
	語用論茶寮	p.22

書籍展示	p.23
----------------------	------

★大会テーマ★

語用論研究の温故知新

★ 大会スケジュール（概要） ★

2022 年 11 月 26 日（土） Zoom オンラインのみ

2022 年 11 月 27 日（日） Zoom オンラインあるいは京都大学吉田キャンパス

※大会 2 日目は、オンラインでも、京都大学の会場でもご参加いただくことができます。対面方式での参加を希望される方は、必ず事前申込時にその旨お知らせください。

大会で使用する Zoom 情報、および研究発表の発表資料へのアクセスリンクは、参加費を支払い、参加登録をした方に 11 月 23 日（水）前後にメールでお伝えする予定です。

11 月 26 日（土）

09:30～16:30：口頭発表 1（Room 1）
09:30～16:30：口頭発表 2（Room 2）
09:30～16:30：口頭発表 3（Room 3）
09:30～15:50：口頭発表 4（Room 4）
16:40～17:00：会員総会

11 月 27 日（日）

10:00～11:00：基調講演 1
11:10～12:10：基調講演 2
13:10～15:40：シンポジウム
15:40～15:55：大会発表賞表彰式・閉会式
15:55～16:40：語用論茶寮

★ 大会参加登録・参加費 ★

大会に参加するには、**事前申込が必須**となります。期間内に事前登録（一般会員・非会員は参加費納入を含む）をお願いいたします。

参加費：一般会員 1,000 円、学生会員（院生・学部生）無料 非会員 1,000 円

※会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」で登録。

※今年度会費が納入済みでないと、事前登録はできません。

※一般会員・非会員の事前登録には、参加費の納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。

※事前登録の締切は 11 月 18 日（金）です。

※非会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「【非会員】日本語用論学会 第 25 回大会参加申し込みフォーム」にて登録してください。

会費・大会参加費免除について：

日本語用論学会では、激甚災害およびこれに準ずる災害で被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただいたことにより、当該年度の「年会費」ならびに「年次大会参加費」を免除させていただきます。（すでに会費納入がお済みの場合、次年度の会費に充当することも可能です。）

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

【日本語用論学会事務局】

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学 秦かおり研究室内

E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp

日本語用論学会 第 25 回大会 プログラム(一覧表)

大会テーマ「語用論研究の温故知新」

開催日時：2022 年 11 月 26 日(土) 9:30 開始、27 日(日) 10:00 開始

開催方法：【1 日目】 Zoom オンライン〈リアルタイム方式〉のみ
【2 日目】 Zoom オンライン〈リアルタイム方式〉／
京都大学吉田キャンパス〈対面方式〉

*大会で使用する Zoom 情報、および研究発表の発表資料へのアクセスリンクは、参加費を支払い、参加登録をした方に 11 月 23 日（水）前後にメールでお伝えする予定です。

大会のコンテンツは以下の通りです。

【口頭発表】(35 件)

- ◆ **リアルタイム方式**（発表・質疑ともライブ）で行います。
- ◆ ZOOM 上で実施すること以外は、対面による通常の学会発表と同じです。
- ◆ 【口頭発表 25 分+質疑応答 10 分】
- ◆ 画面共有で資料が提示されます。

【会員総会】【特別講演】【シンポジウム】【大会発表賞表彰式】【閉会式】

- ◆ いずれも **リアルタイム方式**で行います。開催形態は上記「開催方法」をご覧ください。
- ◆ 26 日(土)は【会員総会】を行います。
- ◆ 27 日(日)は【特別講演】【シンポジウム】【大会発表賞表彰式】【閉会式】を行います。

【11月26日(土)】 ZOOM オンライン (リアルタイム方式)

会場 Online	Room 1	Room 2	Room 3	Room 4
午前	司会：有光奈美（東洋大学） 司会補佐：小松原哲太	司会：大塚生子（大阪工業大学） 司会補佐：名塩征史	司会：居關友里子（国立国語研究所） 司会補佐：城綾実	司会：吉田泰謙（関西外国語大学） 司会補佐：岡本雅史
① 9:30-10:05	①角出 凱紀（京都大学[院]）：誇張に用いられるメタファーの考察 p.7	①OZAWA Miyabi（University of Wisconsin-Madison）：The Use of Overt First-Person Singular Pronouns in Opinion-Negotiation Sequence in Japanese Conversation p.10	①李 頌雅（大阪大学）：能楽の稽古場面における指導行動のマルチモーダル会話分析：指導者はどのように身体動作の訂正を行うのか p.13	①尹 盛熙（関西学院大学）：動詞性名詞の述語用法とその談話機能について p.16
② 10:10-10:45	②木下 蒼一朗（東京大学[院]）：はいはい面白い面白い：アイロニー専用表現に見る慣習化された間接性 p.7	②ITAKURA Hiroko（Shinshu University）：Self-praise sequence and politeness in Japanese conversation p.10	②市原 明日香（目白大学）：感謝のやりとりに現れるアップシフトーフットティングと同調シフトを中心に p.13	②楊 世沢（京都大学[院]）：中国語“给”の語用論的機能 p.16
(10分休憩)	司会：小松原哲太（神戸大学） 司会補佐：松浦光	司会 6：武黒麻紀子（早稲田大学） 司会補佐：名塩征史	司会：増田将伸（京都産業大学） 司会補佐：城綾実	司会：サウクエン・ファン（神田外国語大学） 司会補佐：岡本雅史
③ 10:55-11:30	③山中 信彦（埼玉大学）：比喩の観点からみた「告白行為」動詞の通言語的考察 p.7	③SASAMOTO Ryoko（Dublin City University）：Emoji and coding: Do emoji involve coding? p.10	③宋 凌逸（名古屋大学[院]）：助言行為に影響を与える要因の分析ー親疎関係と事柄の深刻度に注目してー p.14	③賈 羽飛（金沢大学[院]）：商業地における禁止サインに見られる画像の役割の日中比較 p.17
④ 11:35-12:10	④有光 奈美（東洋大学）・高嶋 由布子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）・数見 陽子（NPO法人手話教師センター）・矢野 羽衣子（関西学院大学手話言語研究センター）：日本手話の対比構文「A否定B」の談話構造（※手話通訳付き） p.8	④SZABO Martina Katalin & OTANI Naoki（Tokyo University of Foreign Studies）：Corpus Analysis of Japanese and Hungarian Negative Emotive Words from a Discourse Interactional Perspective p.11	④西阪 亮（関西学院大学[院]）：会話中の非難から解き明かす友人同士の親しさー能力に関する優劣が話題となるやりとりに着目してー p.14	④IKE Saya（Meijo University）：Changes in Linguistic Landscape of Japan: Life 'with Corona' p.17
12:10-13:10	Lunch Break			
会場 Online	Room 1	Room 2	Room 3	Room 4
午後	司会：工藤俊（駒沢女子大学） 司会補佐：松浦光	司会：池沙弥（名城大学） 司会補佐：大志民彩加	司会：難波彩子（関西学院大学） 司会補佐：ツオイ・エカテリーナ	司会：深田智（京都工芸繊維大学） 司会補佐：中馬隼人

⑤ 13:10-13:45	⑤水田 洋子 (国際基督教大学): 「逆に言えば」の使用に関わる論理関係および談話構造: 「裏を返せば」との比較 p.8	⑤SUGAYA Yusuke (Osaka University): Interaction of Eye Fixation with Grammatical Salience: A Psycholinguistic Study on the Language-Vision Interface p.11	⑤大塚 生子 (大阪工業大学): イン／ポライトネスの参与枠組みと多面的フェイスワーク p.14	⑤岩井 恵利奈 (信州大学／慶應義塾大学[院]): 口語英語に見られる for sure の分析—位置と機能に着目して— p.17
⑥ 13:50-14:25	⑥山本 綾 (東洋大学): 「私、〇〇な人だから」—会話における自己呈示— p.8	⑥NAKAMURA Akira (Atomi University): <i>It</i> versus <i>That</i> as the Subject of English Set Phrases p.11	⑥畑 和樹 (東京都市大学): 他者の巻き込みによる組織としての報告の実践: 学校協議会報告の事例にみられる参与役割の複雑性 p.15	⑥山内 昇 (大同大学): 現代英語における speak of the devil の語用論的拡張について p.18
(10 分休憩)	司会: 尾谷昌則 (法政大学) 司会補佐: 小松原哲太	司会: 椎名美智 (法政大学) 司会補佐: 大志民彩加	司会: 市原明日香 (目白大学) 司会補佐: ツオイ・エカテリーナ	司会: 大谷直輝 (東京外国語大学) 司会補佐: 中馬隼人
⑦ 14:35-15:10	⑦工藤 俊 (駒沢女子大学): 言語使用の三層モデルからみる「マジ」和「ぴえん」の語用論的機能 p.9	⑦KLOYAN Luiza (Graduate School of Nagoya University) & HORIE Kaoru (Nagoya University): Interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions p.12	⑦ASAD Marina Bahaa (立命館大学[院]): 日本語の間接的不満談話の開始部における前置きとしての「評価」と「正当化」 p.15	⑦徳永 和博 (三重大大学): 聞き手の commitment から見た規約的含意表現 as を含む節の意味解釈 p.18
⑧ 15:15-15:50	⑧三瀬 凧乃 (立命館大学[院]): SNS における新奇表現「どうぞする」にみる「どうぞ」のメトニミー的意味拡張 p.9	⑧YAMADA Akitaka (Osaka University): Historical Pragmatics using Space-State Models p.12	⑧昂 燕妮 (名古屋大学[院]): ほめに対する不同意の応答に関する研究 —日本語と中国語の初対面・友人同士の会話をもとに— p.15	⑧木津 弥佳 (ノートルダム清心女子大学)・行木 瑛子 (沖縄大学): 第一・第二言語話者間のメタ語用論的意識に関する考察 —I think の解釈に着目して— p.18
⑨ 15:55-16:30	⑨山崎 由佳 (京都大学[院]): ハッシュタグの順序: 場所を表すタグを中心に p.9	⑨SHIBUYA Yoshikata (Kanazawa University): Colloquialization and genre variation: the case of the <i>let's</i> construction p.13	⑨謝 カン月 (名古屋大学[院]): 中国語の討論に現れる効果的・非効果的な「譲歩」に関する一考察 —「会話展開」と「対人配慮」の観点から— p.16	
(10 分休憩)				
会場 Online	メインルーム Main Room			
16:40-17:00	会員総会 General Meeting of Members p.19			

**【11 月 27 日(日)】 ZOOM オンライン（リアルタイム方式）または
京都大学吉田キャンパス（対面方式）**

会場	メインルーム（Zoom）／国際高等教育院棟 3 階 31 講義室（対面会場 Onsite）		
午前	基調講演 1（録画配信）Plenary Lecture 1 司会：堀江薫（名古屋大学） p.20		
10:00-11:00	CHEN Xinren (Nanjing University) “Translanguaging impoliteness/incivility in Chinese netizens’ commentaries”		
(10 分休憩)	基調講演 2（対面＋ライブ配信）Plenary Lecture 2 司会：金丸敏幸（京都大学） p.20		
11:10-12:10	山梨正明（京都大学名誉教授・関西外国語大学・日本語用論学会元会長） 「認知語用論の研究プログラム－新たな展開に向けて」		
12:10-13:10	Lunch Break		
午後	25 周年記念シンポジウム「人と AI とメディアを繋ぐ語用論の新展開」 25th Anniversary Symposium 司会：岡本雅史（立命館大学） p.21		
13:10-15:40	[講演 1] 東中竜一郎（名古屋大学教授） 「対話システムが与える語用論研究の新たな視点」 [講演 2] 小磯花絵（国立国語研究所教授）「日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性」 [講演 3] 三宅和子（東洋大学名誉教授）「モバイル時代の語用論－「打ちことば」は何を変えたか」		
15:40-15:55	大会発表賞表彰式 PSJ-24 Best Presentation Award Ceremony 閉会式 Closing Ceremony p.22		
会場	[茶寮 1] 国際高等教育院棟 3 階 32 講義室（対面会場のみ）*Onsite only [茶寮 2] Room2（Zoom）／国際高等教育院棟 3 階 31 講義室（対面会場 Onsite） [茶寮 3] Room3（Zoom のみ）*Online only		
	語用論茶寮 Salon de Pragmatique p.22 進行：小山哲春 [茶寮 1]、小松原哲太 [茶寮 2]、堀内ふみ野 [茶寮 3]		
15:55-16:40	[茶寮 1] 山梨先生を 囲んで （対面限定）	[茶寮 2] シンポジウムの 登壇者を囲んで （対面＋オンライン）	[茶寮 3] 語用論カウンセリングルーム 「興味と研究の繋げ方」 （オンライン限定）

11月26日(土)

□頭発表(9:30~16:30) 会場: Room1

1-①②司会: 有光 奈美(東洋大学)
司会補佐: 小松原 哲太

1-①9:30~10:05

誇張に用いられるメタファーの考察

角出 凱紀(京都大学大学院)

本発表では「滝のような NP」「山のような NP」「鬼のような NP」に代表される誇張のためのメタファーについての考察を行う。これらのメタファー表現は共通して「イメージ・メタファー (image metaphor)」を成立の基盤としていることが伺えるが、NP のスロットに生起できる名詞句の自由度には程度差が存在する。具体的には、「滝のような NP」では NP が「汗」と「雨」にほぼ限定される一方で、「鬼のような NP」では「暑さ」「忙しさ」など多種多様な名詞句が NP のスロットに生起可能である。本発表では、各表現のこのような振舞いの違いが各メタファー表現における文法化の程度差に起因するということを主張する。

参考文献: (1) Bybee, J. 2015. *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Lakoff, G. 1987. *Image Metaphors. Metaphor and Symbolic Activity* 2 (3): 219-222.

1-②10:10~10:45

はいはい面白い面白い: アイロニー専用表現に見る慣習化された間接性

木下 蒼一郎(東京大学大学院)

「はいはい面白い面白い」「Peter's a genius, huh!」といった発話は、関連性理論において、乖離的小詞「はいはい」「huh!」にコード化された手続き的意味によって話し手の乖離的態度が高次表意として復元される表現(以降アイロニー専用表現)であるとされてきた。しかし ①この乖離的態度は、言語的にコード化されている高次表意・推意の典型例とは異なり、明示的に取り消し可能である。これは乖離的態度が高次表意とは別のレベルにあることを示唆する。さらに ②アイロニー専用表現はアイロニカルでない発話同様、高次表意レベルの矛盾とみなせる「ムーアのパラドクス」を引き起こす。これは裏の意味としての乖離的態度ではなく「表の意味」の方こそがアイロニー専用表現の高次表意であることを意味する。①②より本発表は、アイロニー専用表現が伝達する乖離的態度は疑問文“Can you VP?”が慣習的に伝える依頼的態度と同種の「慣習化された間接性」のレベルにあると主張する。

参照文献: (1) Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: CUP. (2) Higashimori, I. 1994. “Cognition, Synonymy and Definitions.” *Euralex 1994 Proceedings*, 93-100. (3) Wilson, D. and D. Sperber. 1993. “Linguistic Form and Relevance.” *Lingua* 90, 1-25.

1-③④司会: 小松原 哲太(神戸大学)

司会補佐: 松浦 光

1-③10:55~11:30

比喩の観点からみた「告白行為」動詞の通言語的考察

山中 信彦(埼玉大学)

本発表の主眼は、告白行為を表す動詞の類義語・類義表現(「告白する」「打ち明ける」「泥を吐く」等)を比喩の観点から日・中・韓・英・独・露の6言語で比較し類似点・相違点を明らかにすることである。対象は、「自分自身に関わる内容で公言しにくいことを聞き手に伝える」ことを表す語彙である。

主としてシソーラスから得られたデータについて、どのような観点からみて「告白する」という意味で使われるかによって語彙を分類した。観点は、まず共時的な関連する他の意味によって、それがなければ語構成や語源によって設定する。

6言語の類似点としては、<話す><開く><出す><見せる>という観点から捉えられる語が多い。後の三つは、話し手の心中に隠されているものを、心を開くことによって出し、見せることとして告白行為が概念化されている、と考えると統一的に説明できる。

参考文献：(1) Deignan, A. 2005. *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam. (2) Lakoff, G. and M. Johnson. 2003[1980]. *Metaphors We Live by*. Chicago. (3) 瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩』. 東京. (4) Sweetser, E.E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. New York.

1-④11:35~12:10

日本手話の対比構文「A否定B」の談話構造

有光 奈美（東洋大学）・高嶋 由布子（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）・数見 陽子（NPO 法人手話教師センター）・矢野 羽衣子（関西学院大学手話言語研究センター）

本研究は、日本手話特有の対比構文「A 否定 B」の用法を分類し、日本語で省略される傾向にある要素 A を日本手話では省略せずにこの構文で言及することを指摘する。NHK 手話ニュース 845 で日本手話を母語とする者が日本語原稿を日本手話に翻訳したニュース映像の手話文と、同時に読まれた日本語音声と比較した結果、「違う」、「しない」と訳される語 (Matsuoka et al. 2016; 市田 2005)、NMM (non-manual markers, 非手指要素) の「首振り」3 つの否定のマーカの使用があった。この構文は皆が想定する A と異なって B であるという情報を伝える談話条件を持ち、日本語と日本手話で談話の作り方が異なることを示している。

参考文献：Matsuoka, Kazumi, Uiko Yano, Hitomi Akahori, Norie Oka (2016), Notes on modals and negation in Japanese Sign Language, *Studies in Languages Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*, 15, 1-20. Kaitakusha, Tokyo, Japan.

1-⑤⑥司会：工藤 俊（駒沢女子大学）

司会補佐：松浦 光

1-⑤13:10~13:45

「逆に言えば」の使用に関わる論理関係および談話構造：「裏を返せば」との比較

水田 洋子（国際基督教大学）

日本語の「逆に言えば」は条件節から発達した談話標識とみなせるが、その使用に関して以下のような問いが生じる。「逆」はどのような観点からの逆関係を表すのか。前後の命題は論理学における「逆」の関係にあるのか。「言えば」は表現上の違いを表すのか、それとも内容的な新情報も関わっているのか。類似の表現「裏を返せば」とは互換なのか。

論理関係や対照のタイプに基づいて「逆に言えば」と「裏を返せば」のコーパスデータの質的・量的分析を行い、それぞれの使用を論理学と語用論の観点から解明して、両者の比較を行った。それにより、両者が談話中での話者と聴者の思考にどのように関わっているかが示唆される。両者ともに基本的に何らかの対照的な観点が関わるが、「逆に言えば」は使用範囲がより広く、ニュアンスも含めれば「裏を返せば」との互換性は限定的であることを示す。また本研究の応用可能性についても言及する。

参考文献：(1) de Swart, H. 1998. *Introduction to Natural Language Semantics*. CSLI Publications. (2) Fischer, K. (Ed.) 2006. *Approaches to Discourse Particles*. Elsevier. (3) Mann, W.C., and Thompson, S.A. 1988. Rhetorical Structure Theory: Toward a Functional Theory of Text Organization. *Text*, 8(3). 243-281.

1-⑥13:50~14:25

「私、〇〇な人だから」—会話における自己呈示—

山本 綾（東洋大学）

会話において参加者が自分自身について語る際に、「私、紅茶が好きな人だから」のように「人」を用いることがある。「〇〇な人」「〇〇する人」として自己に言及するふるまいは、しばしば、若者や女性に特有とみなされたり、幼稚さや自己中心性の現れだと批判されたりする。

本研究では、実際の会話に基づき、「〇〇な／する人」発話が誰によってどのようになされ、どのように応答されるのかを探る。資料は、発表者が収録した友人間の雑談（10代～20代の女性、約4時間）と、『日本語日常会話コーパス』に収録された雑談・用談（10代～60代以上の男性および女性、約188時間）である。(1)「〇〇な／する人」発話者の性と年代、(2)発話の形式的な特徴を明らかにし、(3)発話の場面と(4)発話直後の他の会話参加者による応答について、相互行為の社会言語学の立場からそれぞれ類型化を試みる。

参考文献: (1) 秦かおり. 2017. 「スモール・ストーリー」. 鈴木亮子ほか (編) 『話しことばへのアプローチ』. 249-252. 東京: ひつじ書房. (2) 松岡智文. 2021. 「アーヴィング・ゴフマンの社会学—ありふれた『コミュニケーション』を考える—」 『Cute.Guides』 . <https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/goffman>.

1-⑦~⑨司会: 尾谷 昌則 (法政大学)

司会補佐: 小松原 哲太

1-⑦14:35~15:10

言語使用の三層モデルからみる「マジ卍」と「ぴえん」の語用論的機能

工藤 俊 (駒沢女子大学)

本研究の目的は、「iPhone 壊れた。マジ卍。」や「私こんな顔してたっけ? うえーんぴえん」などの例にみられる若者ことば「マジ卍」と「ぴえん」を比較考察し、廣瀬 (2017) などによる一連の研究で提唱されている「言語使用の三層モデル」の観点から、語用論的機能の違いを説明することである。「マジ卍」も「ぴえん」も、統語的および意味的なふるまいは軌を一にするうえ、廣瀬が述べている「私的自己中心」という日本語固有の特徴を有する点も共通している。しかし、かたや「マジ卍」は対人関係調節に重きが置かれ、状況報告の側面 (実際の情報伝達) は二次的である一方、「ぴえん」は状況報告がベースにあり、対人関係調整機能は副次的であることを、いくつかの例に照らし合わせて主張する。また、この研究を通じて、日本語の若者ことば全般も視野に入れ、包括的な説明が可能か否かも模索する予定である。

参考文献: (1) 廣瀬幸生. 2016. 「主観性と言語使用の三層モデル」、『ラネカーの (間) 主観性とその展開』、333-355、開拓社. (2) 廣瀬幸生. 2017. 「自分の言語学—言語使用の三層モデルに向けて—」、『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』、2-24、開拓社: 東京.

1-⑧15:15~15:50

SNS における新奇表現「どうぞする」にみる「どうぞ」のメトニミー的意味拡張

三瀬 凧乃 (立命館大学大学院)

本発表の主眼は、Twitter 上で観察される「どうぞする」という新奇表現が多様な意味用法で使用される点に着目し、各表現を含む事例を分析した上で、本表現を「引用の「どうぞ」+する」の形式から生じた表現であると考え、これらを引用名詞類のメトニミー的拡張 (山口 2018) という観点から考察するところにある。具体的には、本表現が主に「相手の行為を促す<勧め>」または「動作主による譲渡行為」を表すことを指摘し、これらが話し言葉における一語文「どうぞ」の使用文脈と関連することから、本表現では「どうぞ」という語によって近接性をもつ行為が示され、動詞「する」と結びつくことでその行為が行われることを表すようになったと考察する。また、事例の中には「どうぞ」という語とは近接しない行為が示されるものもあることから、本表現が「何らかの対象の移動を伴った動作主の具体的な行為」を示す表現としても使用されつつあることについて言及する。

参考文献: (1) 山口治彦. 2018. 「引用表現の広がりをつなぐを追う—引用名詞類とその意義拡張をもとに—」、『英文学研究 支部総合号』、11、241-250.

1-⑨15:55~16:30

ハッシュタグの順序: 場所を表すタグを中心に

山崎 由佳 (京都大学大学院)

本発表では、ソーシャルメディアで用いられるハッシュタグの順序について論じる。ハッシュタグはテキスト自体の中に配置されるメタデータであり、この用法は、言語運用における新たな面を表しうると考えられる。本発表は、ソーシャルメディアでの投稿内にハッシュタグが複数現れる場合に着目し、さらにハッシュタグが接続する際の順序の選好性を探ることを意図する。特に「場所」を表すハッシュタグに焦点を当て、Twitter 上の投稿データの分析を経て、次の2点を提示する。

- (1) 場所を表すハッシュタグを含む投稿は、複数の接続したタグを含む傾向が強いと考えられる。
- (2) 場所を表すハッシュタグの順序には、iconicity や coherence に関わる特徴が見られる。

参考文献: (1) Pasho, J. 2017. “#INSERTDIETHERE: Tracing the Techno-Linguistic Associations of Dietary Hashtags on Instagram”. Master’s Thesis. Carlton University. (2) Zappavigna, M. 2015. “Searchable talk: the

linguistic functions of hashtags”. *Social Semiotics* 25: 1–18. (3) 鍋島弘治朗. 2006. 「世界秩序 (World Order) 序説：類型論的アプローチ」『關西大學文學論集』 56(1): 93–116.

□頭発表 (9:30~16:30) 会場： Room2

2-①②司会：大塚 生子 (大阪工業大学)

司会補佐：名塩 征史

2-①9:30~10:05

The Use of Overt First-Person Singular Pronouns in Opinion-Negotiation Sequence in Japanese Conversation

OZAWA Miyabi (University of Wisconsin-Madison)

My aim is to investigate how the overt first-person singular pronouns contribute to the execution of a particular action in the opinion-negotiation sequence. Adopting the framework of Conversation Analysis and Interactional Linguistics, the study analyzes naturally occurring conversation taken from the Corpus of the Everyday Japanese Conversation from National Institute for Japanese Language and the author’s video-recorded collection. The study shows that the overt forms are assembled in different social actions depending on how the co-participants align with their stance toward the target(s) they are discussing. When they do not align, the overt forms are used in account by demonstrating the speaker’s epistemicity toward the target as the evidence. When they align, some overt forms work to exclude the speaker(s) from the category invoked while commenting on a given target. They are also used to initiate a topical talk or personalize a relevant assertion in conveying (partial) alignment.

References:

Mori, J. (1999). *Negotiating agreement and disagreement in Japanese: Connective expressions and turn construction*. John Benjamins Publishing Company.

Ono, T. & Thompson, S. A. (2003). “Japanese (w)atashi/ore/boku 'I': They're Not Just Pronouns.” *Cognitive Linguistics*, 14, 321-47.

2-②10:10~10:45

Self-praise sequence and politeness in Japanese conversation

ITAKURA Hiroko (Shinshu University)

This study qualitatively examines self-praise in naturally-occurring Japanese conversations between two friends with a focus on forms of self-praise and politeness functions. Instances of self-praise were collected from BTSJ corpus and analyzed by adopting a taxonomy drawn from social media communication. The paper shows how self-praise in conversation is formed differently from social media communications, including modifications in different domains consisting of word choices, turn-taking strategies and narrative strategies. Second, the paper discusses how self-praise forms turn sequences and play politeness functions. A supportive self-praise turn sequence appeared to consolidate solidarity and enhances face, thereby contradicting the general assumption that self-praise is immodest and should therefore be discouraged. On the other hand, a competitive self-praise turn sequence appeared to represent the salience of modesty in Japanese culture and conflicts caused by its breach. Possible factors involved in formations of different types of turn sequences included explicitness of self-praise and gender.

2-③④司会：武黒 麻紀子 (早稲田大学)

司会補佐：名塩 征史

2-③10:55~11:30

Emoji and coding: Do emoji involve coding?

SASAMOTO Ryoko (Dublin City University)

It is generally acknowledged that interpreting emoji is particularly context sensitive and involves a massive amount of inferencing. However, the discussion on the semantics and pragmatics of emoji is still ongoing and some scholars (c.f. Forceville 2020) argue that some symbols like road signs involve coding. This would suggest that other image-based symbols such as emoji could also involve coding. The question is, do they indeed involve coding or is their interpretation solely pragmatically inferred?

In this presentation, I will examine a range of emoji in comparison with other linguistic forms including onomatopoeia. Using ideas from relevance theory (Sperber and Wilson 1986/1995), I will argue that some emoji might not involve coding and instead contribute to relevance by guiding the interpretation process via its representational resemblance. This idea allows for a continuum of word-ness without the need to determine the coded meaning for image-based input into inference.

References:

- Forceville, C. 2020. *Visual and Multimodal Communication: Applying the Relevance Principle*. Oxford: Oxford University Press.
Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

2-④ 11:35~12:10

Corpus Analysis of Japanese and Hungarian Negative Emotive Words from a Discourse Interactional Perspective

SZABO Martina Katalin & OTANI Naoki (Tokyo University of Foreign Studies)

The main goal of this presentation is to reveal the wide range of different usages and pragmatic functions of *Negative Emotive Words* based on corpus data of two languages: Hungarian and Japanese. For this purpose, two words have been selected (together with their word-form variations): the Hungarian *durva* (lit.) ‘coarse’ and the Japanese やばい (*yabai*) (lit.) ‘dangerous’. We filtered out all the occurrences of these words from two corpora (the Japanese CEJC and the Hungarian HuTongue), then investigated and manually annotated (multivariable analysis) the meanings and functions they fulfil. We claim that some of their functions may be viewed as subtypes of pragmatic markers (e.g. evidential or attention marker) and they can be considered as an important tool for positive politeness strategies (Daly et al. 2004, Kádár 2017). We also point out some differences between the usage of different word-forms, as well as between the two languages.

References:

- Daly, N., Holmes, J., Newton, J., Stubbe, M. 2004. Expletives as solidarity signals in FTAs on the factory floor. *Journal of Pragmatics* 36(5). 945-964.
Kádár, D.Z. 2017. Politeness in pragmatics. In Fernández-Domínguez, J., Aronoff, M. (eds.), *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
<https://doi.org/10.1093/acrefore/9780199384655.013.218>.

2-⑤⑥ 司会：池 沙弥（名城大学）

司会補佐：大志民 彩加

2-⑤ 13:10~13:45

Interaction of Eye Fixation with Grammatical Saliency: A Psycholinguistic Study on the Language-Vision Interface

SUGAYA Yusuke (Osaka University)

This study examines the interplay between eye fixation and grammatical saliency in sentences. We usually produce and comprehend linguistic expressions vis-à-vis visual scenes perceived, interpreting objective situations in a subjective manner (Langacker 2008). Accordingly, referents (indicated by an NP) can be assigned a different status of saliency, which can be concerned with one's eye movements. The degree of prominence given to them can be related to the following: (i) the thematic role (e.g., agent, patient, and recipient), (ii) the grammatical structure (e.g., nominative, objective, and oblique cases), and (iii) the information structure (e.g., topic and novelty). To explore these roles and efforts, we conducted visual-world eye-tracking experiments (cf. Tanenhaus et al. 1995), which presented different sentence structures in Japanese on the same visual images. Conveniently, the Japanese language allows passive markers to modify the status of arguments and scrambling or different orders of arguments.

References:

- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
Tanenhaus, Michael K., Michael J. Spivey-Knowlton, Kathleen M. Eberhard, and Julie C. Sedivy. 1995. Integration of visual and linguistic information in spoken language comprehension. *Science* 268(5217): 1632–1634.

2-⑥ 13:50~14:25

It versus *that* as the Subject of English Set Phrases

NAKAMURA Akira (Atomi University)

In many set phrases anaphoric *it* and *that* occur as subject, as in:

Bob: Can I see you again?

Sally: That depends. (Spears 2012: 185)

That is replaceable by *It* here, which is supported by native speakers' judgments.

After pointing out that previous literature on the subject has its limitations to account for this fact, this study presents the following prediction: the use of not *it* but *that* to refer to the thing which has been already identified by the hearer could be seen as the violation of the quantity maxim by P. Grice in that the use of *that* is more informative than is necessary. This non-observance of the maxim might bring out some sort of implicature with the use of *that*, for example, the speaker's interest, attention, surprise, concern or empathy.

References: (1) Kamio, A. and M. Thomas. 1999. "Some Referential Properties of English *It* and *That*." In A. Kamio, K. Takami, and S. Kuno eds., *Function and Structure*, 289-315. John Benjamins. (2) Spears, R. D. 2012. *Common American Phrases in Everyday Contexts*. 3rd ed. McGraw-Hill.

2-⑦~⑨司会：椎名 美智（法政大学）

司会補佐：大志民 彩加

2-⑦14:35~15:10

Interpretability of pragmatic gaps in Armenian and Japanese Noun Modifying Clause Constructions

KLOYAN Luiza (Graduate School of Nagoya University) & HORIE Kaoru (Nagoya University)

Our aim is to reconsider Noun-modifying clause constructions (NMCCs), which have been divided into two major types (European-type and Asian-type) in linguistic typology. From this perspective, Armenian NMCCs are an interesting case in point as they include not only "European"-type finite NMCCs, but also non-finite NMCCs. Crucially, the latter NMCCs resemble "Asian"-type GNMCCs (Matsumoto 1997) like Japanese. This study thus compares Armenian "non-finite" NMCCs and Japanese NMCCs. It was found that Armenian NMCCs show similar patterns of acceptability with their Japanese counterparts when the head noun is "causally" or "temporally" connected to the modifying clause by pragmatic inference. However, the parallelism ends when the head noun needs to be "spatially" connected to the modifying clause. This indicates that the "spatial" connectivity gaps between the head noun and the modifying clause are harder to fill by pragmatic inference than the "temporal" or "causal" connectivity gaps.

References:

Comrie, Bernard (1996) "The Unity of Noun-Modifying Clauses in Asian Languages. Pan-Asiatic linguistics: Proceedings of the fourth international symposium on languages and linguistics, 1077-1088. Salaya, Thailand: Mahidol University at Salaya;

Comrie, Bernard (2002) "Typology and Language Acquisition: The Case of Relative Clauses." In: Anna Giacalone Ramat (ed.) *Typology and Second Language Acquisition*, 19-37. Berlin: Mouton de Gruyter.

堀江薫、プラシヤント・パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ』 研究社.

Matsumoto, Y. 1997. *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame Semantic Approach*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

2-⑧15:15~15:50

Historical Pragmatics using Space-State Models

YAMADA Akitaka (Osaka University)

In Historical Pragmatics, researchers inevitably use corpus data, and statistical methods are appreciated as a necessary skill for a fine-grained investigation. A common practice is to use chi-square test, but outside linguistics (economics, psychology, and social sciences), several limitations have been pointed out, and elaborate Time Series Analyses have been actively utilized (Hagiwara 2021). Nonetheless, the mathematics has been the hurdle, unfortunately preventing researchers from taking advantages of such potentially advanced technologies. By taking two recent studies as our primary example (Yamada 2022a, b), the present study explains the drawbacks of the chi-square test, and introduces the fundamentals of Space-State Model, aiming to help researchers to use the state-of-the-art technique in their own research.

References:

Hagiwara, J. (2021) *Time Series Analysis for the State-Space Model with R/Stan*. Singapore: Springer.

Yamada, A. (2022a). Diachronic constructional alternation of high-applicative forms: a Time-Series analysis using a State-Space Model for the choice among *sasete itadak*, *sasete moraw*, *sasete kudasar*, and *sasete kure*. Oral Presentation at the 66rd Meeting of the Mathematical Linguistic Society of Japan. Sep 17, Tokyo, Online/Nihon University.

Yamada, A. (2022b). Constructionalization of the Japanese addressee-honorification system. The 23rd Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association. J. F. Online. Sep 3-4.

2-⑨15:55~16:30

Colloquialization and genre variation: the case of the *let's* construction

SHIBUYA Yoshikata (Kanazawa University)

This study discusses the *let's* construction as in *Let's try that first*. The *let's* construction is often analyzed in terms of grammaticalization, where it is explored in comparison with its 'full' form, the *let us* construction (e.g., Hopper and Traugott 2003: 10-13). These two constructions have also been discussed in terms of colloquialization (e.g., Leech et al. 2009: 239), which is the perspective from which the *let's* construction is examined in this study. The discussion here is based on the data obtained from the Corpus of Historical American English (COHA). The analysis consists of two main parts. In the first part, Kendall's tau is computed to evaluate whether the diachronic patterns observed in COHA are significantly correlated with time. In the second, collostructional analysis is used to identify distinctive collexemes. The results suggest that colloquialization is a genre- and collexeme-sensitive phenomenon.

References: (1) Hopper, P.J. and Traugott, E.C. 2003. *Grammaticalization* (2nd edition). Cambridge: Cambridge University Press. (2) Leech, G., Hundt, M., Mair, C. and Smith, N. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.

□頭発表 (09:30~16:30) 会場: Room3

3-①②司会: 居關 友里子 (国立国語研究所)

司会補佐: 城 綾実

3-①09:30~10:05

能楽の稽古場面における指導行動のマルチモーダル会話分析—指導者はどのように身体動作の訂正を行うのか—

李 頌雅 (大阪大学)

本研究の目的は、能楽教室の仕舞の稽古場面において、指導者である能楽師が指導する際に用いた言語・非言語行動の特徴及びそれに対する学習者の反応を解明することにある。定期的に行われた能楽教室で相互行為の映像データ (約 10 時間) を収録し、マルチモーダル会話分析 (Mondada 2018) の記述方法を参照して文字化を行い、Keevallik (2010) が提示した「身体的引用 (bodily quoting)」と比較し、能楽師が仕舞において学習者の身体動作を訂正する場面を分析した。その結果、能楽師が問題となった学習者の身体動作を指摘することで訂正を開始することが明らかになった。次に、正しい動作の実演と説明を行いつつ、学習者の身体動作を再現して比較することで、問題を明示することが観察された。その訂正を受けた学習者が能楽師の実演と説明に従い、身体動作を模倣することで理解を呈示することもあると分った。

本発表では、能楽師が仕舞の指導に用いた方法と学習者の反応に関する事例の分析結果を提示する。

参考文献: (1) Keevallik, L. 2010. "Bodily quoting in dance correction". *Research on Language and Social Interaction*, 43(4), 401-426. (2) Mondada, L. 2018. "Multiple Temporalities of Language and Body in Interaction: Challenges for Transcribing Multimodality." *Research on Language and Social Interaction*, 51(1), 85-106.

3-②10:10~10:45

感謝のやりとりに現れるアップシフト—フットィングと同調シフトを中心に—

市原 明日香 (目白大学)

本発表は「感謝」の発話におけるアップシフトについて指摘し、そのはたらきを明らかにすることを目的とする。本発表のアップシフトとは普通体基調の友人関係の会話において、文末の丁寧体 (デス・マス) や授受の謙譲語 (テイタダク等) に切り替えられることを指す。アップシフトの機能については、これまで談話展開や指標性からの分析がなされてきた。また、特定の発話行為 (反応要求、不満表明、依頼、勧誘、謝罪) にアップシフトが現れることも指摘されているが、感謝については十分に分析されていない。恩恵の授受場面のオープン・ロールプレイによって会話データを収集し、出現数を調査し、友人同士の感謝のやりとりにみられるアップシフトを分析した。アップシフトでコードを変え、友人から感謝する者

へとフットイング (Goffman 1981) を変化させると、感謝される側からもアップシフトの同調があり感謝が遂行される会話について考察する。

3—③④司会：増田 将伸（京都産業大学）

司会補佐：城 綾実

3—③10:55～11:30

助言行為に影響を与える要因の分析—親疎関係と事柄の深刻度に注目して—

宋 凌逸（名古屋大学大学院）

Brown & Levinson(1987)によるポライトネス理論は、個性や個人の視点に注目している欧米社会で生まれたため、「社会的視点の欠如」などの問題点が指摘された。中国や日本などのアジア社会では、集団意識や恩返しなど、社会的側面も強調される。しかし、ある言語行為を検討する際に、B&L(1987)のモデルは多く使われた。

本発表では、B&L(1987)のモデルではなく、「社会的視点」も含まれる Spencer-Oatey (2000)によるラポールマネジメント理論を用い、中国人日本語学習者と日本語母語話者の「友人に対する助言行為」を比較した。さらに、親疎関係と事柄の深刻度がどのように助言行為に影響するかについて検討した。学習者の助言はその2つの要因に影響されるが、母語話者では、事柄の深刻度の影響しか見られなかった。また、学習者は、相手と仲良くなりたい気持ちが強いが、馴れ馴れしく、相手に押し付けがましく思われるかもしれない。そのため、人間関係に悪い影響を及ぼす恐れがあることも示唆している。

参考文献：スペンサー＝オーティ、ヘレン（編著）.2004.『異文化理解の語用論—理論と実践—』田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理（訳）研究社〔原著：Spencer-Oatey, H.(2000), *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*. New York: Continuum Publishing Company.〕

3—④11:35～12:10

会話中の非難から解き明かす友人同士の親しさ—能力に関する優劣が話題となるやりとりに着目して—

西阪 亮（関西学院大学大学院）

本研究の目的は、友人同士の会話中に行われる「非難」を手掛かりに、参与者たちの親しい関係性を解き明かすことである。そこで本研究では、友人同士の間で行われた「評価発話—同意—非難」という発話連鎖に着目し、分析を行った。その際、まず非難を行う理由を解明することから始め、①評価発話に対する同意の応答が【肯定的評価への応答】および【自己卑下への応答】の2つの観点において逸脱的である点、②その逸脱的応答が両者の優劣差を顕在化させ、溝を深める配慮を欠いた行為であるという点の2つにおいて非難が適切となっていることが分かった。また、個人の能力という個別的でセンシティブな話題に関する【知識の共有】が見られ、参与者たちはそれを互いに会話の中で利用し合うことで【共通の知識】にアクセスできる権利を有していることを主張している。そこに、参与者同士の親しい関係性を垣間見ることができた。

参考文献：初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子.1996.「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」、『日本語教育』88、128-139.

大津友美.2004.「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス—遊びとしての対立行動に着目して—」、『社会言語科学』第6巻第2号、44-53.

3—⑤⑥司会：難波 彩子（関西学院大学）

司会補佐：ツオイ・エカテリーナ

3—⑤13:10～13:45

イン／ポライトネスの参与枠組みと多面的フェイスワーク

大塚 生子（大阪工業大学）

本発表では、男性の多人数ライン・グループにおける相互行為の分析を通して、これまで十分に検討が行われてこなかった多人数相互行為におけるイン／ポライトネスについて、Goffman(1981)の「参与の枠組み」の観点から検討を行う。基本的に二者間の相互行為を前提としてきた従来のポライトネス理論とは異なり、多人数相互行為では「傍観者」の存在により、誰に対するフェイス侵害や補償なのか、またそれが誰に対してどのように機能しているのかというより多面的なフェイスワークを考える必要がある。

本研究では談話分析を通してこのようなイン／ポライトネスの姿を描き出すと共に、SNS で交わされるこのような多人数相互行為における受け手の義務とその違反、また集団内メンバーの力関係による実質的な発言権の有無等、Goffman の参与の枠組みでは説明できない状況や視点についても議論を行う。

3—⑥13:50～14:25

他者の巻き込みによる組織としての報告の実践—学校協議会報告の事例にみられる参与役割の複雑性—
畑 和樹（東京都市大学）

多人数会話を構築するうえでは、参与者全員の行為を全員に理解可能な共有基盤として積み重ねること、そして相互行為の展開に即して各参与者の役割を明らかにすることが重要である。本発表は、学校協議会報告において報告者と一部参与者の間で執り行われる一時的な相互志向の観察を通じて、制度的多人数会話における参与枠組みの複雑性について考察する。制度的な会議報告の中では、報告の受け手として傍参与者として振る舞うことが適切であるとしても、それぞれの受け手がもつ知識や経験は異なり、報告内容への関与の度合いによっては、より積極的な参与を示すことが期待されることもある。本発表は、報告者が実務を担当した参与者を報告の資源として巻き込む場面に注目し、報告者が行っている報告が報告者「個人」のものではなく、関連する参与者を含めた「組織」によるものとして理解可能となる手続きを記述する。

3—⑦～⑨司会：市原 明日香（目白大学）

司会補佐：ツオイ・エカテリーナ

3—⑦14:35～15:10

日本語の間接的不満談話の開始部における前置きとしての「評価」と「正当化」

ASAD Marina Bahaa（立命館大学大学院）

対話相手に同調してもらうことを求める「間接的不満表明」の語りは、物語の語りの形をとる場合が多いと言われるが、愚痴を言う場面で物語の順番が前後する場合ではどのような要素が優先的に発話されるのか、またそうした非時系列的な組織化が何を志向するのかは依然として明らかではない。そこで、本研究では、実際の日本語母語話者の日常会話データが収録されている『日本語日常会話コーパス』（小磯他, 2022）から間接的不満談話5例を抽出し、不満談話の開始部を分析した。その結果、間接的不満表明の語り手は、不満のターゲットに対する「評価」とそれに続く「正当化」という発話連鎖を、不満の物語を予示する働きを持つ「物語の前置き」として使用することが明らかとなった。そして、間接的不満を表明する際に、単なる自身の感情の報告によって対話相手と共同注意を達成するのではなく、間接的不満談話を「評価」で開始することにより、談話の展開につれて対話相手と共通した評価を得ることを目指しているのではないかと考えられる。

参考文献：(1) 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴『言語処理学会第28回年次大会発表論文集』pp.2008-2012, 2022.3. (2) Drew, P. and Walker, T. 2009. “Going too far: complaining, escalating and disaffiliation.” *Journal of Pragmatics* 41: 2400–2414.

3—⑧15:15～15:50

ほめに対する不同意の応答に関する研究—日本語と中国語の初対面・友人同士の会話をもとに—

昂 燕妮（名古屋大学大学院）

ほめに対する不同意の応答は、謙遜を表す重要な手段ではあるが、相手の好意の拒絶になりやすいため、対人関係に配慮して言語表現を工夫する必要がある。本研究では、日中の初対面・友人同士の会話におけるほめに対する不同意の応答に注目して分析を行った。その結果、いずれの会話場面においても、ほとんどのほめに対する不同意の応答は、不同意の表明を、理由説明/感謝/情報提供/焦点を相手にそらす/同意できる側面の提示といった要素と組み合わせた形で行われていた。また、不同意の応答によって話者間の意見の不一致が生じた後の談話展開の特徴として、日本語では、ほめ手と受け手は協働的に一致できる側面を探って共感を構築する傾向があるのに対して、中国語では、ほめ手が積極的に受け手を説得し、それに応えて受け手も応答を調整して同意を示そうとする傾向が観察された。

3—⑨15:55～16:30

中国語の討論に現れる効果的・非効果的な「譲歩」に関する一考察―「会話展開」と「対人配慮」の観点から―

謝 カン月（名古屋大学大学院）

本研究では、工藤・伊集院（2013）を参考に「譲歩」を「自分の考えや意見を述べるとともに、他説の合理的な箇所を承認して理解を示す発話（A 類の譲歩）、または自説の問題点と限界に言及する発話（B 類の譲歩）」と定義する。「譲歩」は討論において多く現れているが、全てが良い役割を果たしているわけではなく、効果的・非効果的な「譲歩」が存在する。

そこで、本研究は中国語の討論に現れる「譲歩」を取り上げ、会話展開と対人配慮の観点から「譲歩」が効果的であるかどうかについて考察を行った。その結果、討論の会話展開上に問題が生じた場合、譲歩する程度性の高い【A3. 相反する主張に有利な根拠材料の提示】と【B3. 自身の主張の限定】の「譲歩」は最も効果的であることが分かった。また、対人配慮の側面から、短すぎるもしくは共感を示せない「譲歩」よりも、相手の発話の引用や自分の共感を含んだより長い「譲歩」の方が効果的であると考えられる。

参考文献：工藤嘉名子・伊集院郁子. 2013. 「超級学習者の意見文における『譲歩』の論理性」、『東京外国語大学留学生日本語研究センター論集』39、1-15.

□頭発表（09:30~15:50） 会場：Room4

4―①②司会：吉田 泰謙（関西外国語大学）

司会補佐：岡本 雅史

4―①09:30~10:05

動詞性名詞の述語用法とその談話機能について

尹 盛熙（関西学院大学）

本発表の目的は、日本語において事象を表す名詞が様々な形で述語の役割を果たす例を観察し、その用法と談話機能を考察することである。「説明（する）」など、「動詞性名詞（以下 VN）」と呼ばれる行為・状態を表す名詞群は、「する」を伴わずに「オベ室を予約」のような「VN 止め」、「なぜ遅刻を？」のような「VN ヲ止め」の形で述語の役割を果たすことがあるが、前者は後者より談話機能の範囲が狭いことがある。この観察から、日本語では述語の一部を助詞（及び「だ」）などの機能語で代替することで述語の定形性（finiteness）や談話機能の範囲を限定する、即ち事柄における抽象的情報の言語化を抑える戦略が定着していることを主張する。

参考文献：(1) 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』ひつじ書房. (2) 尹盛熙. 2021. 『ことばの「省略」とは何か』大修館書店.

4―②10:10~10:45

中国語“给”の語用論的機能

楊 世沢（京都大学大学院）

本発表は“帮”(help)、“为”(for)、“向”(to) に置き換えられる文を分析することで、“给”(give) の使用制限と語用論的機能を明らかにし、「捉え方 (construal)」の語用論的側面を考察することを目的とする。“给”は授受の意味を持ち、相手の領域に強く介入すると感じられるが、場合によって、話者の熱意 (attitudinal warmth, Gu 1990) を表すと考えられ、ポジティブ・ポライトネス表現と認められる。よって、“给”がプライベートかつ親しい間柄でよく使われる。このことから、“给”の語用論的機能として「親しい人間関係を示すこと」と「距離感を縮めること」という2点があげられる。それを踏まえ、認知言語学で提唱されている「捉え方」という概念が単に事象に対する認識ではなく、聞き手の側面も含まれていることが明らかになる (Croft 2009 ; 本多 2006)。

参考文献：(1) Croft, W. 2009. “Toward a Social Cognitive Linguistics.” In V. Evans and S. Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*, 395-420. Amsterdam: John Benjamins. (2) Gu Y. 1990. “Politeness Phenomena in Modern Chinese.” *Journal of Pragmatics* 14(2), 237-257. (3) 本多啓. 2006. 「認知意味論、コミュニケーション、共同注意―捉え方（理解）の意味論から見せ方（提示）の意味論へー」、『語用論研究』8、1-13.

4—③10:55～11:30

商業地における禁止サインに見られる画像の役割の日中比較

賈 羽飛（金沢大学大学院）

従来の禁止サインの研究は、言語表現を分析したものがほとんどで、それに伴う画像に焦点を当てた研究は極めて少ない。小山他（2016）は、看板が視野に入った時に、そこに掲示されている情報によって意思決定を行うと指摘している。その際に利用する情報には、当然のことながら文字だけでなく、イラストや写真などの画像も含まれる。だとすれば、画像という非言語情報も公共サインの効果的な理解に影響を与えているはずであり、そこでは言語と同様に、画像の使用にも文化的な差異が予想される。本研究では、日本語と中国語の禁止サインを題材に画像の役割を比較した。日本では言語情報を補足する画像が多い。たとえば、地図などによる補足説明やお辞儀画像による低姿勢な態度の伝達を行っている。他方、中国では禁止の強制力を強化し、注目させるためのイラスト風の画像の使用が多い。それは、禁止表現への注目度を高め、禁止の効果を重視しているからだと言える。

参考文献：小山雅明・高橋由樹・椎塚久雄. 2016. 「“そそる看板”デザインの基礎的考察」、『日本感性工学会論文誌』15(1)、65-73.

4—④11:35～12:10

Changes in Linguistic Landscape of Japan: Life ‘with Corona’

IKE Saya (Meijo University)

This study investigates longitudinal changes in COVID-19 related signage in Japan. Our prior investigation has shown the complex and fluid stance taking and positioning processes within linguistic landscapes (LL). Upon collection of over 1,500 signs in Kyoto, this study further documents the ongoing changes in LL by comparing the signage between 2021 and 2022. Our data reveal a significant decrease in bottom-up temporal request signs and increase in unified and formularised request signs. While many signs were put up in front of the shops in 2021, signs were discreetly displayed inside the shops (i.e., backgrounded) in 2022. The backgrounding of such signs also suggests that the signs have truly become part of the ‘landscape’, losing the primary function of being noticeable. The current LL investigation proves that the LL is fluid and mirrors what is valued at the time in a given society.

References: (1) Lacsina, N., & Yeh, A. (2022). Keep social distance: The linguistic landscape of the major malls in Jeddah amid the COVID-19 pandemic. *Topics in Linguistics*, 23(1), 39-61. (2) Landry, R., & Bourhis, R. Y. (1997). Linguistic landscape, and ethnolinguistic vitality. *Journal of Language & Social Psychology*, 16(1), 23-49.

4—⑤⑥司会：深田 智（京都工芸繊維大学）

司会補佐：中馬 隼人

4—⑤13:10～13:45

口語英語に見られる for sure の分析—位置と機能に着目して—

岩井 恵利奈（信州大学／慶應義塾大学大学院）

本発表では、口語英語に見られる for sure を取り上げる。

(1) Oh, for sure, you’re trying to wrap your head around it, Amara? (COCA: SPOK 2017)

(2) Fondness is not the right word, for sure. (COCA: SPOK 2015)

(3) VELSHI: Do you think you got a good mentor?

GARDENHOUR: For sure. (COCA: SPOK 2005)

For sure は態度表明副詞 (cf. Biber 1999 et al.: 10.3) として命題の確かさや信頼性についての話者の判断（認識性）を表すが、(1)と(2)のように、周辺部（発話頭・発話末）で用いられ、文脈によって異なる役割を果たし、また、(3)のように単独で現れ、「もちろん」などを意味する応答を担う場合もある。本発表では、The Corpus of Contemporary American English 1990–2019 (COCA) の spoken セクションから収集した事例を対象に、for sure の機能を明らかにし、また位置によりそれらの機能がどのように異なるのかを考察する。

参考文献：(1) Olmen, D. V. and J. Šinkūnienė (eds.). 2021. *Pragmatic Markers and Peripheries*. Amsterdam: John Benjamins. (2) Kaltenböck, G., E. Keizer and A. Lohmann (eds.). 2016. *Outside the Clause: Form and Function of*

4—⑥13:50~14:25

現代英語における speak of the devil の語用論的拡張について

山内 昇（大同大学）

Speak of the devil(噂をすれば) は, (a) 先行文脈においてある人物が話題になっており, (b) その人物が発話者の視野内に現れ, (c) その人物は有生物であるという 3 つの条件が揃った場合に使用される (X: I heard Sally got tenure. [Sally appears.] Y: Well, speak of the devil. (Gasser & Dyer 1986)). しかし, コーパスデータを観察すると, 当該表現は, 話題の人物本人ではなくその妻が現れた際や, 話題の人物からメールが届いた際, 誕生日に関する話の最中にケーキが運ばれてきた際など, (a-c) の条件のいずれかが満たされない場合にも使用可能であることが分かる。本研究では, The Movie Corpus (Davies 2019) に基づき, そのような語用論的拡張事例がどの程度使用されているのか, いつ頃発生したのかを調査する。そのうえで, 上記 (a-c) の条件群は「優先規則体系」(Jackendoff 1990) を成しており, 条件の 1 つが欠けたとしても他の条件が満たされていれば使用が認められることを示す。

参考文献: (1) Gasser, M. and M. G. Dyer. 1986. “Speak of the Devil: Representing Deictic and Speech Act Knowledge in an Integrated Lexical Memory.” *Proceedings of Annual Conference of the Cognitive Science Society*, 8, 388–398. (2) Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. The MIT Press.

4—⑦⑧司会: 大谷 直輝（東京外国語大学）

司会補佐: 中馬 隼人

4—⑦14:35~15:10

聞き手の commitment から見た規約的含意表現 as を含む節の意味解釈

徳永 和博（三重大学）

本発表は, 対話の中で用いられる節頭・節末に生起する as 節の意味解釈を検討する。この種の as 節は, 補足情報を表すとされている (Huddleston and Pullum 2002; 大竹 2016)。また, この as 節は節内の内容が真であることを伝える規約的含意表現の一種とされている (Potts 2002, 2005)。しかし, こうした分析は主に話し手側からの特徴づけである。本発表では, Potts の成果を基に, Geurts (2019) が提案した commitment の枠組みを援用し, 聞き手の解釈を考慮しながら, 対話における as 節の意味解釈のメカニズムを検討する。結論として, commitment の理論を援用すれば, 補足情報という曖昧な特徴づけを, より詳細に記述できる点を示す。具体的には, 談話内で補足情報となるかどうかは, 話し手と聞き手の間で commitment が共有された場合であり, 共有されない場合は, 聞き手側から事後的に as 節の規約的含意が修正される点を主張する。

参考文献: (1) Geurts, B. 2019. “Communication as Commitment Sharing: Speech Acts, Implicatures, Common Ground.” *Theoretical Linguistics* 45, 1-30. (2) Potts, C. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.

4—⑧15:15~15:50

第一・第二言語話者間のメタ語用論的意識に関する考察—I think の解釈に着目して—

木津 弥佳（ノートルダム清心女子大学）・行木 瑛子（沖縄大学）

本研究は, 日本語母語の上級英語学習者と英語母語話者間の会話における I think の解釈の違いについて, Zhang (2014) が提唱した機能をもとに考察する。代表的な認識的スタンス標識である I think は使用頻度が高く, 学習者が容易に使用できるようになると言われている。本研究では, 学習者・母語話者間の留学前後の会話データを用いて, その中に出現した計 87 例の学習者による I think を, 会話の当事者達（学習者と母語話者）が意味機能の観点から事後分析した。その結果, 43 例 (49.4%) で学習者・母語話者間に解釈の差異が見られ, 特に和らげ・不確かさ・場つなぎの意図で使ったものが強調の意味に受け取られるケースが 9 例 (10.3%) あり, 上級学習者であっても, 比較的容易に使用できる I think が実は思わぬ形で受け止められている可能性が明らかとなった。本研究の結果は, 近年論じられているメタ語用論的意識 (McConachy 2018) の教育的必要性を示唆するものである。

参考文献: (1) Zhang, G. 2014. “The Elasticity of I Think: Stretching Its Pragmatic Functions.” *Intercultural*

Pragmatics 11(2), 225–57. (2) McConachy, T. 2018. *Developing Intercultural Perspectives on Language Use: Exploring Pragmatics and Culture in Foreign Language Learning*. Bristol, UK: Multilingual Matters.

会員総会 General Meeting of Members (16:40~17:00)

会場：メインルーム

会員の方をご参加ください。

11月27日(日曜日)

基調講演(10:00~12:10)

会場：メインルーム(Zoom)／国際高等教育院棟3階 31 講義室(対面会場)

○基調講演1(録画配信)(10:00~11:00)

司会：堀江 薫(名古屋大学)

Translanguaging impoliteness/incivility in Chinese netizens' commentaries
CHEN Xinren (Nanjing University)

Abstract: This talk reports a study that aims to focus on an underexplored phenomenon in the study of impoliteness, namely how and why it is realized through translanguaging on social media. Based on comment threads collected from Chinese media, it exhibits the formational diversity of translanguaging impoliteness/incivility practices, discusses the inferential mechanism of their sense making and explores some major motivations underlying the choice of them. It is hoped that the study can enrich existing understandings of impoliteness/incivility, apart from extending its scope of formation, by showing how its realization can be affected by the context of social media and meanwhile benefit from technological affordances.

Key words: impoliteness; incivility; translanguaging; social media; Chinese

Bio-statement:

Xinren Chen is professor of English and linguistics at Nanjing University, China. He is currently president of China Pragmatics Association (CPrA), (co-)editor of *Studies in Linguistics and Literature*, *East Asian Pragmatics* and *China Language Strategies*, and associate editor of *Pragmatics*. He has published extensively in Chinese as well as international journals such as *Foreign Language Teaching and Research*, *Journal of Pragmatics*, *Lingua*, *Pragmatics and Society*, *Journal of Historical Pragmatics*, *English for Academic Purposes*, and *Acta Linguistica*. His major monographs include *The Pragmatics of Overinformativeness in Conversation* (Shaanxi Normal University Press, 2004), *Pragmatic Identity: How to Do Things with Words of Identity* (Beijing Normal University Press, 2018), *Critical Pragmatic Studies on Chinese Public Discourse* (Routledge, 2020), *Exploring Identity Work in Chinese Communication* (Bloomsbury, 2022), etc. He has also (co-)edited some books like *Psycho-Pragmatic Analyses of Public Discourse* (Jinan University Press, 2013), *Pragmatics and Foreign Language Teaching* (Foreign Language Teaching and Research Press, 2014), *Politeness Phenomena across Chinese Genres* (Equinox, 2017), *East Asian Pragmatics: Commonalities and Variations* (Routledge, 2022), etc.

○基調講演2(対面+ライブ配信)(11:10~12:10)

司会：金丸 敏幸(京都大学)

認知語用論の研究プログラム—新たな展開に向けて

山梨正明(京都大学名誉教授・関西外国語大学・日本語用論学会元会長)

本講演では、認知言語学の観点から、語用論の研究プログラムの新たな位置づけを試みる。認知言語学は、人間の認知能力にかかわるさまざまな要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチをとる。認知言語学の研究は、文法を中心とする従来の研究で扱われてきた言語現象を根本的に問い直すだけでなく、これまで等閑視されてきた語用論にかかわる現象にも目を向け、研究のスコープを広げつつある。認知言語学のアプローチの基本的な特徴は、認知能力を反映する主体の経験的な基盤に基づき、言語現象をダイナミックに探究している点にある。この認知能力の観点から、言葉の使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく新しい語用論の研究を、「認知語用論」の研究として定義する。本講演では、認知言語学の視点を背景にした新しい語用論の観点から、文法・論理・レトリックに関わる言語現象を分析し、これまでの言語学における文法論と意味論の研究領域を越える言語学の新たな研究の方向を探っていく。

【講師略歴】

山梨正明

ミシガン大学, 大学院博士課程修了 (Ph. D., 1975)
京都大学名誉教授, 関西外国語大学教授

(主要著書)

『発話行為』(大修館書店), 『比喩と理解』(東京大学出版会), 『推論と照応』(くろしお出版), 『認知言語学原理』(くろしお出版), 『認知構文論』(大修館書店), 『認知意味論研究』(研究社), 『修辭的表現論』(開拓社), 『自然論理と日常言語』(ひつじ書房), 『言語学と科学革命』(ひつじ書房), ほか。

シンポジウム Symposium (13:10~15:40)

会場：メインルーム (Zoom) / 国際高等教育院棟 3 階 31 講義室 (対面会場)

25 周年記念シンポジウム「人と AI とメディアを繋ぐ語用論の新展開」

司会：岡本 雅史 (立命館大学)

1. 趣旨

25 周年記念となる本シンポジウムでは、AI との対話システム、日常会話コーパス、打ちことば、といった新たな研究課題・言語資源・言語メディアの観点から、伝統的な語用論研究に揺さぶりをかけることを目指す。具体的には、人間同士の対話では暗黙の裡にできてしまうため等閑視されがちな対話メカニズムに対する新たな視点、多様な日常会話場面を網羅的に扱うことのできる会話コーパスという新たな言語資源がもたらす語用論研究の可能性、さらには若者にとって馴染み深いソーシャルメディアという新しい言語環境から生まれた「打ちことば」がもたらした言語変化、といった最新の研究動向を紹介し、フロアとの活発な議論を通じて、新時代の語用論研究を展望したい。

2. 登壇者紹介

東中竜一郎 (名古屋大学教授)：対話システムの構築を通じて、人間同士の対話の仕組みに迫りたいと考えている。最近では、対話ロボットやマルチモーダル対話システムにも興味があり、関連するコンペティションを運営している。

小磯花絵 (国立国語研究所教授)：大規模なコーパスの構築とそれを活用した音声コミュニケーション研究をおこなっている。最近は幼児や自閉症者のことばにも関心をもち、関連研究者とともにコーパスの共同開発・共同研究を進めている。

三宅和子 (東洋大学名誉教授)：モバイル・メディアにおける談話的特徴とリアル・バーチャルの融合的コミュニケーションの形成を追及してきた。最近は発話者のモビリティ (移動性) とモバイルな言語実践との関連に特に興味をもっている。

3. 講演内容 (話題)

講演 1 対話システムが与える語用論研究の新たな視点

東中 竜一郎

スマートフォン上の音声エージェントやコミュニケーションロボットなど、対話システムが身の回りに見られるようになってきた。そのような中、システムがユーザや対話状況に即して発話をすることの重要性が高まっている。本講演では、対話システムの基本的なメカニズムについて説明した後、自身が運営する対話システムライブコンペティションや対話ロボットコンペティションにおける事例を参照しながら、ユーザや対話状況に即した発話の実現に向けた最近の取り組みについて述べる。そして、語用論研究の知見がどのように対話システムに活用されるかについて展望し、対話システムを用いた語用論研究の可能性について述べる。

講演 2 日常会話コーパスがもたらす語用論研究の可能性

小磯 花絵

今年 3 月に一般公開された『日本語日常会話コーパス』は、(1) 日常場面の中で当事者たち自身の動機や目的によって自然に生じる会話を対象とすること、(2) 多様な場面の会話をバランスよく集めること、(3) 音声だけでなく映像まで含めて収録・公開すること、(4) 談話行為情報や形態論情報、韻律情報など多様なアノテーションを提供することを特徴とする研究資源である。多様な日常場面を網羅的に扱うことのできる映像付きの会話コーパスの共有化は、世界的に見ても新しい試みである。コーパスについて紹介した上で、こうした特徴を有する研究資源がもたらす語用論研究の可能性について考えたい。

講演 3 モバイル時代の語用論―「打ちことば」は何を変えたか

三宅 和子

モバイル・メディアが浸透し始めて 20 数年、コミュニケーションは大きく変化してきたが、これまでのところ、言語実践や談話を対象にした研究、語用論研究でメディアを考慮したものは多いとはいえない。その理由の一つとして、従来の枠組みでは解決できない現象が多いことがあげられよう。本発表では、「打ちことば」と総称される表現を批判的に検証しつつ、研究対象を厳密に区別し具体的な言語現象を客観的に記述する重要性を主張する。ついで LINE の語用論的研究例を紹介し、その研究傾向と分析における留意事項を説明し、今後のメディアを取り入れた語用論研究の可能性について考える。

大会発表賞表彰式 PSJ-24 Best Presentation Award Ceremony・ 閉会式 Closing Ceremony (15:40～15:55)

会場：メインルーム (Zoom) / 国際高等教育院棟 3 階 31 講義室 (対面会場)

語用論^{サロン}茶寮 (15:55～16:40)

[茶寮 1] 国際高等教育院棟 3 階 32 講義室 (対面会場のみ)

[茶寮 2] Room2 (Zoom) / 国際高等教育院棟 3 階 31 講義室 (対面会場)

[茶寮 3] Room3 [受付] (Zoom のみ)

[茶寮 1] 山梨先生を囲んで (対面限定)

MC：小山 哲春

[茶寮 2] シンポジウムの登壇者を囲んで (対面＋オンライン)

MC：小松原 哲太

[茶寮 3] 語用論カウンセリングルーム「興味と研究の繋げ方」(オンライン限定)

* 事前申込制・当日参加可 (ただし、事前申込者優先)

* 受付に集合後、各メンターのいる部屋 (ブレイクアウトルーム) に分かれて参加

* 事前申込期限：11/20 (日) <https://forms.gle/WifMH94ZgTfUY8T17>

MC：堀内 ふみ野

